

アトピー性皮膚炎治療研究会 第29回シンポジウム

(2024年2月3・4日)

アクトシティ浜松コンgresセンター

本田 哲也

浜松医科大学皮膚科学講座教授

はじめに

アトピー性皮膚炎治療研究会第29回シンポジウムを浜松市で開催いたしました。当研究会は、アトピー性皮膚炎の治療法について医学的に正しく評価し、最新情報を共有し、発展させることを目的に毎年1回開催されているシンポジウムです。ディスカッションを重視した会であり、参加者はアトピー性皮膚炎治療に関わっている、あるいはこれから関わろうとする皮膚科医およびメディカルパート

ナーが主体です。近年のアトピー性皮膚炎治療の進歩を反映して年々参加者は増加傾向で、今回は最終的に約300名の方に参加いただきました。

テーマ

今回は「治療を届ける～どうするアトピー～」をテーマとしました(図1)。アトピー性皮膚炎の治療法はここ数年で飛躍的に進歩しました。従来治療に加え、近年は生物学的製剤や経口低分子化合物による全身療法を選択肢が多数加わりました。またステロイド以外の外用治療の選択肢も複数登場しています。これら新薬は従来治療では達成できなかった治療効果を発揮し、アトピー性皮膚炎患者のQOLの改善に大きく貢献しています。一方でこれらの新規治療法の存在を知らず、従来の治療法のまま症状コントロールが不十分な患者もいまだ多く存在します。さらに、続々と新規治療法が登場する中、医療従事者側にとってもどの治療法が最適かは手探りの状態です。

したがって、本学会のテーマは“新しい治療法を患者に届ける”“現時点で最適な治療法を届ける”という意味を込めて「治療を届ける」といたしました。また適切な治療法を悩みながら探っていくという意味を込め、副題に「～どうするアトピー～」を付記いたしました。なお、浜松も舞台の1つとなった2023年のNHK大河ドラマ「どうする家康」をもじったことはいうまでもありません……。



図1 事務局長の藤山俊晴講師(写真右)と看板前で



図2 懇親会での医局員と
の一コマ

プログラム

一般演題は合計23、スポンサードセミナー・シンポジウムは合計8つと、多数の演題応募と協賛をいただきたいへん盛況となりました。一般演題では新しい治療の有効性、課題等に触れた内容が多く、時間が押すほどの活発な討議をいただきました。

スポンサードセミナー・シンポジウムでは、会の本来の趣旨、テーマをしっかりと汲んでいただき、各メーカーの方には新薬の宣伝はともかく“患者さんにとってベストな選択肢は何か”という原点に戻り、しっかりとディスカッションする企画をつくっていただきました。

どのプログラム・ご講演も秀逸でしたが、あえて一つ触れるとすると、shared decision making (SDM) についてお話しいただいた京都大学の中山健夫先生のご講演は、EBM (evidence-based medicine) とSDMの違いや類似性、アトピー性皮膚炎治療におけるSDMの考え方などについてわかりやすく教えていただき、会場からの反響も大きかったように感じました。また特別講演では痒みの最新の分子メカニズムについて理化学研究所の岡田峰陽先生に、招聘講演ではイメージング技術を用いた角化メカニズムについて東京工科大学の松井毅先生にそれぞれ講演いただきました。

アトピー性皮膚炎の臨床面をしっかりと学習したあと、その背後のメカニズムについて基礎研究者の先生から複雑な内容を明快にわかりやすくご講演いただき、とてもよいバランスになったと思います。総合的にプログラムは大成功だったと自画自賛しております。

なお、懇親会はコロナ前に戻って通常スタイルで行い、多くの参加者の方にギョウザ、うなぎなど、浜松名物を楽しんでいただきました。

おわりに

参加者が100名を超えるような大きな学会を主催するのは初めてのことで、不安を抱えつつ準備を進めたというのが実のところですが、しかし、アトピー性皮膚炎治療研究会世話人の先生、参加者の先生、協賛メーカー様、運営会社の方々、そして医局員みんなのおかげでなんとか無事に会を終えることができました(図2)。会に携わっていただいたすべての方に、厚くお礼を申し上げます。